

平成26年度徳島大学総合科学部部局長裁量経費

総合科学部創生研究プロジェクト実践報告

グローバリズムとモラエス

—モラエスが世界に広げた〈徳島の自然・人・心〉の再構築—

宮崎隆義, 石川榮作, 佐藤征弥, 境泉洋

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

A Report of the Project Studies in 2014:

Globalism and Moraes

—Reevaluation of Nature, People and Heart of Tokushima in the World
through W. de Moraes—

Takayoshi Miyazaki, Eisaku Ishikawa, Masaya Satoh, Motohiro Sakai

Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University

1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima, 770-8502, Japan

E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

Abstract

This report is a record of the activities in 2014 of Moraes's Studies Group launched on July 31, 2010. The members of Moraes's Studies Group, Takayoshi Miyazaki (English Literature, Comparative Literature), Eisaku Ishikawa (German Literature, Comparative Literature), Masaya Satoh (Plant Physiology), Mtohiro Sakai (Clinical Psychology), all at the Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University, have been continuing analytical research on Moraes's works and trying to open new facets of Moraes's biographical aspects, including the activities of organizing exhibitions and lectures on Moraes.

As the basic activities we organized and have been organizing regular meetings every month or every two months, having read Moraes's *O "Bon-odori,, em Tokushima, Ó-Yoné e Ko-Haru*, and now reading *Relance da Alma Japonesa*.

Our activities are still going on and developing with the cooperation with other local groups in Tokushima and Kobe, and also developing by visiting Leiria, Coimbra and Lisbon in Portugal in March 2015.

Key Words: Wenceslau de Moraes, Globalism, Tokushima, Moraes's Studies

1. はじめに

本報告は、徳島大学総合科学部部局長裁量経費・平成 26 (2014) 年度総合科学部創生研究プロジェクトによる研究成果及び実践の報告である。

研究プロジェクト名は「グローバリズムとモラエス—モラエスが世界に広げた徳島の〈自然・人・心〉の再構築—」であり、研究プロジェクト参加者は、大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部の石川榮作 (ドイツ中世文学, 比較文学), 佐藤征弥 (植物生理学), 境泉洋 (臨床心理学), 宮崎隆義 (英文学, 比較文学) の 4 人で、石川を除く 3 人はいずれも平成 21 年度, 22 年度, 23 年度に開講した、徳島大学大学院総合科学教育部博士課程前期での共通科目「プロジェクト研究 I」の担当者であった。

本研究プロジェクトの目的は、プロジェクトの遂行にあたって、母体となっている「総合科学部モラエス研究会」の基本的な活動として定例に開いている例会・読書会での成果を基に、モラエスの著作について新たな考察を加えて論考を公表すること、及び県内の関係団体とともにモラエスの顕彰活動を行なうことである。

2. モラエス研究会—平成 26 年度の活動記録—

本研究プロジェクトは、平成 25 年度に引き続いて採択を認められたものであるが、平成 25 年度に立てた将来計画を踏まえつつ平成 26 年度の年度計画を立てて具体化した。先述したように「総合科学部モラエス研究会」の基本的な活動として、研究例会・読書会を毎月 1 回程度開催することを目標として、以下のように実施した。

研究例会・読書会の実施状況 (平成 26 年度分)

- ・平成 26 年 4 月 26 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 26 年 6 月 7 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 26 年 7 月 26 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 26 年 8 月 30 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 26 年 9 月 27 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 26 年 10 月 18 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 26 年 11 月 29 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 27 年 1 月 24 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 27 年 2 月 21 日 【研究会例会・読書会】
- ・平成 27 年 3 月 28 日 【研究会例会・読書会】

毎回の読書会では、平成 24 年 (2012) から題材として使用していたモラエスの『おヨネとコハル』(岡村多希子訳, 彩流社, 1989 年) が一応の読了となったため、その後には『日本精神』(岡村多希子訳, 徳島県立文学書道館, 2014 年) が刊行されたこともあり、これを読書会の題材として取り上げて現在に至っている。例会・読書会では、これまでのように教員が作品中で気づいたことを提示して、参加者相互で議論しながら、地元の参加者たちの記憶にある昔の状況などを貴重な情報として教示提供していただいた。

その研究成果として、論文及び報告書を『徳島大学地域科学研究』第 4 巻に以下のように刊行している。

論文：

- ・「ポルトガルの大衆紙 “CIVILIZAÇÃO” が 1930 年 1 月号で伝えたモラエスの墓、告別式、彼の部屋に関する記事について」(佐藤 征弥・岡村 多希子・境 泉洋・石川 榮作・宮崎 隆義)
- ・「モラエスの庭— (4) 生へのまなざし、死へのまなざし—」(宮崎隆義・石川榮作・佐藤征弥・境泉洋)

報告：

- ・平成 25 年度徳島大学総合科学部学部長裁量経費総合科学部創生研究プロジェクト成果報告「グローバリズムとモラエス — モラエスが世界に広げた〈徳島の自然・人・心〉の再構築 —」(宮崎隆義・石川榮作・佐藤征弥・境泉洋)

また、平成 24 (2014) 年 11 月 29 日に徳島大学総合科学部において開催したシンポジウム「神戸と徳島のモラエス」の報告書として以下のものが 2015 年 3 月 25 日に徳島大学より刊行された。

- ・徳島大学総合科学部モラエス研究会編「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト」論集創刊号

3. モラエス顕彰—平成 26 年度の活動記録—

本研究プロジェクトに関連するモラエス顕彰事業として、2014 年は、モラエス研究会として例会・読書会以外に以下のような関連事業を展開した。

パネル展示と解説, シンポジウム:

日時: 平成26年11月29日

場所: 徳島大学全学共通教育棟 4-201 および 202

・パネル展示と解説

「W.de Moraes の5163日」近藤文子氏(徳島日本ポルトガル協会理事)

・シンポジウム「神戸と徳島のモラエス」シンポジウム〜モラエスの実像に迫る〜

展示:

平成26年12月15日〜平成27年2月20日

場所: 徳島大学ガレリア新蔵展示室

「W.de Moraes の5163日」近藤文子氏(徳島日本ポルトガル協会理事)



パネル展示
「W.de Moraesの5163日」
12時40分〜13時20分
※※ 全学共通教育棟 4-202講義室
解説 近藤文子 (徳島日本ポルトガル協会理事)

シンポジウム
「神戸と徳島のモラエス」
〜モラエスの実像に迫る〜
14時00分〜17時00分
※※ 全学共通教育棟 4-201講義室

基礎講演
題目 「神戸領事としてのモラエスの役割」
講演者 山田 聡 (徳島大学文学部教授)

シンポジウム
コーディネーター 石川 崇作 (徳島大学総合科学部 教授)
パネラー 藤原 信義 (徳島大学総合科学部 教授)
山田 聡 (徳島大学文学部教授)
宮崎 隆義 (徳島大学総合科学部 教授)
佐藤 征弥 (徳島大学総合科学部 教授)
コーディネーター 岡村 多希子 (徳島大学総合科学部 教授)
近藤 文子 (徳島日本ポルトガル協会理事)

平成26年
11月29日 [土]
12時40分〜17時00分
徳島大学 常三島キャンパス
全学共通教育棟
4-201講義室 / 4-202講義室

お問い合わせ: 徳島大学総合科学部 石川研究室 Tel.089-856-7142

また、総合科学部より支援を受けてポルトガルに佐藤と宮崎とが渡航し、姉妹都市であるレイリア市において交流会を行い、モラエス研究会の活動を紹介した。

・徳島大学総合科学部モラエス研究会の活動紹介

日時: 平成27年3月10日

場所: ポルトガル共和国レイリア市立図書館

さらに、リスボンにおいては、在ポルトガル共和国東博史日本大使の招きで、大使館公邸において現地リスボンのモラエス会会長である Pedro Barreiros 氏ご夫妻と交流することができた。特に、リスボンにある植物園にて日本由来の植物を紹介するにあたり、モラエスの作品から文章を引用して紹介したいとの計画を受け、植物学が専門の佐藤が協力することとなった。



また、モラエスの絵葉書書簡の寄贈者である、駐日ポルトガル共和国大使であった故 Armand Martins Janeira 氏の奥様であった Ingrid Bloser Martins 氏にご自宅に招かれ、モラエスの絵葉書書簡のことでさらなる情報を得ることができた。



このような「総合科学部モラエス研究会」によるモラエスの顕彰事業により、またそのことがマスコミで報道された効果として、「総合科学部モラエス研究会」の知名度も上がり研究会例会・読書会への参加者も徐々に増えつつある。また、研究会代表の宮崎による活動として、平成 26 年度には四国コンソーシアムの e-learning の授業に「モラエスの徳島～グローバリズムと異邦人～」を企画し、後期に開講したが、現在も継続している。また、徳島大学開放実践センターにおいて、秋冬期講座「モラエスの徳島」を開講し、平成 27 年度春夏期にも継続して開講した。

また、宮崎は、社会評論社（東京）より「ほろよいブックスシリーズ」の執筆を依頼され、『東京府のマボロシ』（平成 26 年 12 月刊）に「モラエスの夢—葡萄牙国領事モラエスと第五回内国勸業博覧会—」を掲載した。

4. 今後の展望

神戸の NPO 法人神戸外国人居留地研究会や、大阪、東京の日本ポルトガル協会とも連携が取れる体制が既にできあがっている。また、「総合科学部モラエス研究会」のブログが縁で、モラエスの遠縁の子孫でモラエスの研究も行っている研究者やその関係者、さらにポルトガルに行ったことで、コインブラ大学の関係者とも連絡と連携体制が整いつつある。こうした取り組みと本研究計画とが連動して、さらなる研究のテーマが生まれ、参加者のそれぞれが自分の立場から取り組んでおり、さらに継続してモラエス研究の論文集や

資料集などを刊行することを計画している。

本研究プロジェクトは、中期計画を念頭に置き、地域科学の一側面として、徳島の歴史や文化の諸相を再発見すべく、グローバルな視野から徳島の自然・人・心を眺め、モラエスにとって徳島が何であったかを軸として、ポルトガル、そしてヨーロッパに伝えられた「徳島」を、モラエスがとらえた徳島の「自然」、「人」、「心」を読み取りながら再構築することを目的とした。参加者がそれぞれの専門分野から検討を加え考察し比較しつつ、モラエスの作品分析から読み取るという基礎的な作業や、資料の調査並びに確保を現在も継続している。だが、まだ不十分なものであり、現時点ではまだ継続中の研究プロジェクトであると考えられる。また今年、眉山山頂にあったモラエス館が改築のため 3 月 31 日に休館し、その間の収蔵品の展示のため、5 月 30 日に総合科学部地域交流プラザ 1 階に臨時にモラエス館がオープンされ、所蔵資料を調査し整理する環境ができたので、こうした資料等を精査して何らかの形で公表することを計画している。

さらに多方面との関わりについては、モラエス会や徳島日本ポルトガル協会との繋がりを一層強固なものにしつつ、大阪日本ポルトガル協会、NPO 法人神戸居留地研究会、ロータリークラブなどとの連携並びに協力関係も今後十分に活かしてゆくことを考えている。また、徳島県立文学書道館や図書館、文書館、徳島市立図書館等との連携も得られている。「総合科学部モラエス研究会」としての地道な活動により、例会の参加者から貴重な情報を得ることができ、それを本研究の成果発表に活かすことができる状況ができています。また、地元の文化的な遺産ともいえるモラエスを、若い世代に伝えることは我々の大きな使命のひとつと考えているが、少しずつ例会やイベント等への学生の参加も得られているので、さらに今後も広げてゆきたい。研究を通してモラエスの作品についての十分な紹介を図ることによって、学生や地域の市民、さらには他の地域に対してもモラエスを軸とした文化継承並びに地方創生が行えると考えられる。